

## 歴史遺産としてのドナウと、*Pars pro toto* 論

エステルハージ・ペーテル著（早稲田みか訳）

『ハーン＝ハーン伯爵夫人のまなざし——ドナウを下って——』（東欧の想像力 3）  
松籟社，2008年11月，327頁

戸 谷 浩

書評対象の書は、現代ハンガリーの作家エステルハージ・ペーテルによる小説である。しかも、「ばらけて広がる不確実にして中心不在の『体系』しか認めようとしなないポストモダン」（168頁。以下、書評対象書からの引用は頁数のみを表記する。また、引用文中の強調は全て原文のままである。）の小説である。それゆえその書評も、内容を適切に要約し、批評し、私見を呈するといった通常の書評の体裁は取り得ず、勢い独りよがりな推断と言葉のコラージュのようなものにならざるを得なかった。この点を予めお断りしておきたい。

本書は、シュヴァルツヴァルトの源泉から黒海の河口までドナウ川全体を下ってゆく紀行の書である。もちろん、単純な小説、旅行記などではあり得ず、「訳者あとがき」の言葉を借りれば、「本書は、じつに多元的で多層的なテキストである。ドナウ川を旅する旅人の物語とも読めるし、おじのロベルトをめぐる物語、オーストリア・ハンガリー帝国の歴史や伝統（カフェ文化や料理）についての本、中央ヨーロッパ論批判、さらにはまた小説論としても読める」（324頁）可能性までも秘めている。

主人公の存在も突飛で、「プロの旅人」をしている。ドナウ川を下りながら彼は、要所要所で、これまた正体不明の雇い主に向けて報告書を書き、電報を打つ。加えて、旅の理解を複雑にしているのは、綴られている旅が単一の旅ではなく、二つの異なった旅が重ね合わされていることにも由来

する。二つの旅とは、主人公がまだ少年であった頃（1963年か）、遠縁のおじのロベルトとドナウの源泉からウィーンまで共に旅したこと、そしてもう一つは、1989年の体制転換期に、半ば白日夢でも見ているがごとくに、半ば疾風怒濤の変転の波に乗るかのごとくに旅される、特にブダペシュト以南の「貧しいドナウ」における川下りのことである。

旅を続ける中で、おじロベルトがかつては「東」と「西」を股に掛けた任務を担っていた人物であったこと、しかもその「どことなく秘密めいていてかっこ」（7頁）よかったおじがその後20年間も投獄され、今は容姿も変わり果て、精神さえも病んでいるらしいこと等々が徐々に明らかになってゆく、旅の奇態さはいやが上にも増してゆく。

また、小説のタイトルともなっている「ハーン＝ハーン伯爵夫人のまなざし」とは何であり、何を見つめ続ける眼なのであろうか。この問いに対する具体的な回答は、ある意味当然、提示されていない。ただ、終盤に極めて象徴的な叙述ではあるが、「それから大文字で I AM A WOMAN. 男はあとになって、少女が彼に向けて発した最初の言葉がこれだったことを思い返すだろう。これまで、一言も言葉を交わしていなかった。ただ互いの存在に喜びを感じていただけ。あの子はドナウ伯爵夫人だ。たとえ目が三つあったとしても、紙なんて見ることはありませんわ、少女はいつの日か小生意気にもこんなふうに言うてのけるだろう」（299頁）とあるだけである。

このように掴みどころのない（逆に、掴みどころ満載とも言えるが）、到底一筋縄では行きそうにもない小説を、ここでは、バルカン史家のマリア・トドロヴァが唱える「歴史遺産」という概念を一つの手がかりとして、幾らかでも読み解いて行ってみたい。ただ、存在もしない「中心」に行き着くことがないことは、端から承知の上のことである。

「バルカンとは何か」という問いに対してトドロヴァは、広義には、「バルカンとして知られる地域は、多くの歴史的時代、伝統、遺産の相互作用の結果生じた複雑な所産」（トドロヴァ 2008：37頁）であるとし、また狭義には、「バルカンとはオスマンの遺産である」（トドロヴァ 2008：39頁；マズワー 2008：83-84頁）と断言している。この点からも明らかなように、彼女は（歴史）遺産という概念を、バルカンという地域を理解するのにもっとも有効な概念であるとして、積極的な導入を促している。伝統と遺産は一見似てはいるが、伝統が「過去から残された諸要素を意識的に選択する」のに対して、遺産は「好むと好まざるとにかかわらず、過去から継承されたものすべてにおよぶ」（トドロヴァ 2008：37頁）と解説している。

トドロヴァが歴史遺産という概念の導入を急としたのは、これまでのバルカン研究が「境界に焦点を当てすぎることで、区分や差異、他者性に対して病的にこだわる事態が生じて」（トドロヴァ 2008：36頁）いること。それは近年、境界研究から空間というカテゴリーを用いた空間研究に姿を変えても、「国家主義的、ナショナリストの主張が意図せずに繰り返され、あるいは静的かつ非歴史的な構造分析が生み出されている」（トドロヴァ 2008：36頁）がためである。この「通時的、空間的なゲッター」（トドロヴァ 2008：40頁）から地域を解放するために、彼女は歴史遺産の視点を用いるのである。

トドロヴァの言う歴史遺産の特質としては、次の2点を指摘することができよう。まず第一に歴史遺産は、空間概念に代わるものではないが、「空間分析の長所を保ち、同時に時間のベクトルを洗

練し、それにさらなる歴史的具體性を加えるもの」（トドロヴァ 2008：36-37頁）であるということ。そして第二に、歴史遺産とは前の歴史的時代や国家からそのまま直接的に継承するものではなく、それらの断絶・不在を経て、後世の人々が過去を構成することによって生み出されるものであるということである。過去は真っ直ぐに引き継ぎながら再構成されるのではなく、絶えず更新ないし再評価されているのだという点を我々は銘記しておくべきであろう（トドロヴァ 2008：39-40頁）。

こうした歴史遺産の特質を、ドナウ川自体が帯びるということはないであろうか？つまり、ドナウ川はトドロヴァの説く歴史遺産たりえんやという話である。このやや突拍子もない仮説を検証するために、ドナウ川の詩的カタログと言っても過言ではない『ハーン＝ハーン伯爵夫人のまなざし』の中から、ドナウ川とは何であるのかを言い表した章句を拾い上げ、でき得る限り、ドナウの新たな素顔を浮き彫りにしてみたい。

\*

トドロヴァは、境界の画定や非歴史的なアイデンティティの追求に陥りがちな、従来型の「歴史空間の特徴を確立するような型通りのアプローチ」（トドロヴァ 2008：40頁）を強く批判する。境界研究・空間研究が本質主義の温床になりがちであるとの指摘である。しかしながら、ドナウ川それ自体は紛うことなき空間概念・空間的存在ではないのか。

だが、エステルハージは言う。「ドナウは存在しない。それは火を見るよりも明らかだ。ドナウはものではない、水でもない、水の分子でもない、危険な流れでもない、ドナウは**全体**である、ドナウは形式である」（33頁）と。

またトドロヴァは、歴史遺産は「政治的、経済的、人口統計的、文化的領域などといった、社会生活のさまざまな領域に対するその影響力に従って分類できる」（トドロヴァ 2008：38頁）とも語っている。歴史遺産は現実には、政治的遺産や文化的遺産等として存在するということである。主人公の「私」のドナウ理解もそれに近い。「……金織

物の衣をまとっていた黄色く丸い太陽が、紫の夜の衣装にお召しかえをしながら、少しまた少しと沈んでいく。この刹那、私は理解した。自分はこの川から何もかもを受けとることができるのだということ。山や河川の地理、歴史、民族学、観光、さらには逸話や希望や死者とともに。諸事万般、過去、現在、未来、洪水、日照り、激流、ハラスレー、そして土地の人々。……」(35頁)。

ただ、ドナウ川が単なる空間的存在以上の存在であり、「歴史的具体性を加える」存在であったとしても、そこに「時間のベクトル」を見出すことは果たして可能なことであるのか。これについては、ヨーゼフ・アティッラの詩がその答えを出している。「……考えていたのはドナウ川のこと。幾千年にもわたって目にしてきた幾千ものドナウ川」(135-136頁)。ドナウはそこにあるだけですでに歴史的・時間的な存在であり、「……ウルムとベオグラードを結ぶ何かとは、他でもない、彼、つまりところは旅人その人なのだと言うこともできよう。旅人の乗る満艦飾の船は岸辺に**たたずむ姿なき人々**の間を流れるように進んでいく。とはいえ、船を運ぶのはドナウ川であり、ドナウ川を運ぶのは生きられた生の**重み**であり、その耐えがたき重みをわれわれ旅人は背負っている。だからドナウ川は旅人以前のものであり、またそれだからこそ、彼は水辺の石に腰をおろして、スイカの皮の流れゆくさまをうち眺めているわけなのだ」(82頁)。この川(皮?)を眺めているのは私であって、同時に「幾千人もの祖先たち」である。今この時であって、かつ「幾千年」という時間の層の中のことである(311頁、註136)——我々はそういった眼で、常にドナウを眺める必要があるであろう。

それでは、遺産の継承のされ方についてはどうであろうか。ドナウ川を歴史遺産として継承するということは、そもそも可能な事柄なのであろうか。トドロヴァは繰り返し強調するが、歴史遺産の継承とは、何かバルカンを決定づけるようなものを単純に引き継いだり、それを有すればバルカン人になれますよといった類のものの無邪気な受け渡しではあり得ない、と。例えば、現代につな

がるオスマンの遺産も、何か確としたものの受け渡しの結果としてそこに存在する訳ではなく、「常に進展し蓄積していく過去と、それを評価する人々による数世代にわたる認知という行為とが、相互に作用するプロセスにおいて形成され」(トドロヴァ 2008:39頁)た帰結に他ならないのである。彼女が「問題は音声学を問うことにあるのではなく、統語論を問うことにある」(トドロヴァ 2008:43頁)と言うのは、正にこの謂いであろう。

トドロヴァのこの視角は、次のような問題意識に通ずるものである。「根本的な問題は、ドナウ川を、あるいは真実を、ある体系を発見するがごとくに発見することが可能かどうかにある。ドナウ川は見かけ上、混沌としてはいるが、そのじつある体系のうえに成り立っていて、それを(いずれは)認識することが可能である(体系は認識可能なのであるから)と考えるのか、反対に、そんな体系など存在せず、渦や泡だつ波や流れがあるばかりで、体系は…(中略)…発見するものではなく、われわれが作りあげたものだ…(中略)…と考えるのか」(91-92頁)。

トドロヴァの主張に依るならば、ドナウ川は「真実」でも、認識可能な「体系」でもないということになる。「体系」は「作りあげたもの」に過ぎず、ゆえにそれだけその用い方が肝要になる。歴史遺産としてのドナウ川は、地域の境界を画し、それを閉ざすものであってはならないのであろうし、同時に、そこに住む人々を過度に、また一般化の中に拘束するものであることも、同じく許されないであろう。

ドナウが構築主義的な存在であることは、川下りの旅が黒海に注ぐ河口に達した時、暗示的に次のように述べられている。「スリナの町をぶらつき、水先案内人や砂利の採掘船を眺めては、岸辺の散歩道先端まで歩いて行って、**ドナウ川ゼロキロメートルという表示**を見る。むろんのこと海も。海は目的ではなく敵である。死。海は無限ではない。言うなれば有限そのもの。だがドナウ川は無限だ。無限の終わりにはどんな結末がありうるだろう?…(中略)…有限なるものには墓があるが、無限なるものには何がありうるか?物語がある。

これは水だ、たとえしょっぱくはあっても。川ではない」(296頁)。我々は、ドナウの遺産であれ、オスマンの遺産であれ、その終焉や断絶、不在を起点として、「物語」を紡ぎ続けているのである。

主題もはっきりせず、寄り道も多い中、冒頭に引いた「訳者あとがき」にもあるように、中欧論批判はエステルハージのかなり明確なメッセージであるように思われる。

「数多あるドナウ川、蔓延する中央ヨーロッパ信仰のあれこれに、私はゲップをもよおした、というのはあまりよろしくない表現なので言い換えると、腹が立ってきた。…(中略)…ドナウにまつわる山なす思考、ドナウの精神、ドナウの過去、ドナウの歴史、ドナウの痛み、ドナウの悲劇、ドナウの尊厳、ドナウの現在、ドナウの未来！いったい何の話か？山ほどありすぎて一切合財が疑わしく思えてくる。……」(224頁)。

あるいは、また別の箇所では。

「中央ヨーロッパの話には、何やら説明のつかない高慢にして高揚した気分がついてまわる。…(中略)…古代ローマの残片やバロックの栄光について、グリルパルツァーの秘密の愛人の(これもバロック期の)ハンカチの不在(何やらヴィトゲンシュタインめいた話)について話している。どれもがこの地域の記憶だ。精神安定剤としての文化史！博物館としての教養、慰安といわゆる解決としての博物館——ここでは苦痛や屈辱も一種の勲章、名誉ある栄光の印なのだ。苦痛**そのものが**われらを高めてくれるかのような語り口。『苦難の歳月』をとおして、不可視の何か、知識らしい何か、他者の立場に立って考えることの成果とおぼしき何か蓄積されていたというのだ。そして、そうした何かを世界は必要としているというわけなのだ。…(中略)…こうした啓蒙主義的な、訓戒をたれるようなやり方ではなしに、もっと密

やかに、**個別的に**、共同体ではなくしてその成員である個人のうちに蓄積されるようであってほしい。……」(226-227頁)。

「高慢にして高揚した」中欧論に背を向けたエステルハージのまなざしは、例えば、何の変哲もない「個別」の村やそこに住む人々、そして彼らの当たり前の生活の一齣一齣に向けられてゆく。「……そしてキシュハーズの高台に立った時、不意に雇われ人のこころにひとつのイメージが浮上した。旅のすべてはそのためにあったのだ。そう、**ラーツケヴェを捕捉したのだった**。こうした風情の村ならドナウの河岸にはいくらかもあるが、しかし、これだ、これなのだ。……」(238頁)。

この主人公である「雇われ人」の、そして恐らくは著者エステルハージの確信は、小説の初めに近い部分に書き留められた次の警句を思い起こさせる。

「神の創造し給いしものが混沌を創造したがるとは、もって愚の骨頂なり……神——全体に代わる部分……」(25頁)。

全体に代わる部分、全体を代表する部分、*Pars pro toto* ——雇われ人の眼はどんどん、どんどんと「個別」「部分」に沈潜し、「出来事は無限にあつて、どれもこれもが似たりよったり、ペシュタ・ミシなど、それこそどこにでもいる。それでも五時間の沈黙の末に『あそこだ！』と、喘息に苦しみながら興奮して叫ぶ輩はここにしかいない。河岸のどこでもヘディングをしているが、**瓜ふたつの**体つきをした父親と息子が向かい合っていると、ここしかありえない」(238頁)と快哉を叫ぶのである。

しかし、ドナウ川を歴史遺産と定義し、「ドナウは**全体**である、ドナウは形式である」(33頁)ことを見てきた我々には、全体に代わる部分への沈潜は、俄かには受け入れがたい中欧論批判の帰結ではなからうか。何より、たとえ「全体」を代表するとはいえ、「部分」にのみ閉じこもり、そこにドナウが何たるかを見出そうとするような、やや

逃避的な解法には、エステルハージ自身が不安を抱いているのではなからうか。

なぜなら、全く別のテーマを扱った講演ではあるが、エステルハージはそこで「部分」と「全体」のありうべき関係についてこう述べている。

「私たちは多くを知らないことを理由に、常に部分について話します。これは 20 世紀末の言語です。しかし、わからないことについても取り組むべきです。わからないということは、つまり居心地の悪いことです。そこには欠乏感があります。要するに、私たちは再び、全体を知ることなしに部分について話すことができるのかというカントの問いを繰り返すべきです。目的を欠いた全体のなかで目的に合った部分について話すことは意義あることだろうか、というカントの問いを」（エステルハージ：156 頁）。

ドナウ川を眺める時、彼は自身が心に刻んだ「カントの問い」を反芻することはないのであろうか。

また、『ハーン＝ハーン伯爵夫人のまなざし』には、次のような記述もある。これに従えば、ドナウに生きる人々は、たとえ無名の一僻村に暮らしていたとしても、「隣人」の連鎖の中で、心は、最終的には、ウィーンの 1 区の住民やドナウデルタの漁民にもつながっていることになる。「部分」は、好むと好まざるとにかかわらず、「全体」から一方的に逃れることはできないのである。

「一言にして言うなら、われらはみな隣人ということなのだ。同じ穴に入り、同じ庭の芝生を見ている。互に通じあうおなじみの事と物。雹、洪水、分枝して閃光を発する稲妻、八月の蒼穹、夜明けの平らかさ、魅惑的な女、天使にも似た男児、不動の男、互いをめぐる狂気じみた誤解の数々。

隣人あってこそこのわれら。隣人なしにわれらは存在しない、存在することもできない。隣人とは永遠である。すべてお見通し。われらにしてもが隣人なのだ。われらの隣人にとっての隣

人。だからこそ、必要以上に相手の事情に通じている。何であれ、隠しごとなんかできやしない。『愛と苦しみ、善と悪、勝利と敗北』。何があっても面をさらし対峙しなければならない。隣人は自由を強要する。相手のことならくまなく知っているくせに、おのれのこととなるとからっきしだめだ。それだからこそ隣人を異質にも感じる。制約し、妨害する者というわけだ。隣人はくびきにして柵である。……」（225 頁）。

さらに言えば、エステルハージの解法は、単に空間的な全体性に対し背を向けているがために、非難されるのではない。ドナウ川を歴史遺産とし、「ドナウは**全体**である、ドナウは形式である」（33 頁）としてきた我々にとって、ドナウ川が空間的な概念にのみ収まる存在でないことは、これまで幾度となく確認してきた事項である。それは、例えば、幾千年の時間の層でさえある、手渡された「全体」であった。しかもそれは、固定化し、保持することだけが目的と化したような本質的な遺産などではまるでなく、むしろそれは、例えば、ドナウ水系に暮らしていないような人々に対してさえ、自由な物語の創造を許すような「形式」の一つに他ならなかった。従って、試されているのは、そうした厚い、ドナウという歴史遺産を用いて、いかにドナウ地域を開いてゆくのか、いかにして多くの人々とつながってゆくのか、ということであり、少なくとも「個別」や「部分」に滞留することは、遺産の用い方としてはやはり正当なものではあり得まい。それが我々の結論であろう。

「部分」に臨み、同時に「全体」に思いを馳せる。あるいは、「全体」を見通しつつ、「部分」に降りてゆく。*Pars pro toto*、全体に代わる部分という言葉が、ドナウ川という実体を通して我々に指し示してくれていることは、そうした「全体」と「部分」との往還の大切さなのではなからうか。世界を認識するために分子生物学者が、不可分のはずの全体世界と、切り取られた分析対象の間を往還しつつづけていることについて、福岡伸一は次のような感想を漏らしている。

「この世界のあらゆる要素は、互いに連関し、すべてが一对多の関係でつながりあっている。つまり世界に部分はない。部分と呼び、部分として切り出せるものもない。そこには輪郭線もボーダーも存在しない。

そして、この世界のあらゆる因子は、互いに他を律し、あるいは相補している。物質・エネルギー・情報をやりとりしている。そのやりとりには、ある瞬間だけを捉えてみると、供し手と受け手があるように見える。しかしその微分を解き、次の瞬間を見ると、原因と結果は逆転している。あるいは、また別の平衡を求めて動いている。つまり、この世界には、ほんとうの意味で因果関係と呼ぶべきものもまた存在していない。

世界は分けないことにはわからない。しかし、世界は分けてもわからないのである」(福岡：274-275 頁)。

トドロヴァは歴史遺産の概念を用いてバルカンを捉え直そうとした。本書評では、そのトドロヴァの歴史遺産の概念を援用して、エステルハージの『ハーン＝ハーン伯爵夫人のまなざし』の中に描かれたドナウ川の姿を解こうとしてきた。そして、結果として、ドナウを見つめるまなざしにおける、「全体」と「部分」との果て無き往還の重要性に気づかされた。このドナウ川に関して論じてきたことに、一片でも理があるとするならば、ここで言う「ドナウ川」という言葉は、そのまま「東欧」と言い換えてしまうことすらも、あるいは許されるのではなかろうか。「部分」は「全体」を代表し、そして「全体」は絶えず「部分」に還ってゆかざるを得ないのだから。

#### 参考文献

- エステルハージ、ペーテル(早稲田みか訳・沼野充義解説)  
「バミューダ・トライアングル——21世紀の言語について」、『神奈川大学評論』62, 2009年3月, 150-161頁  
トドロヴァ、マリア「バルカンにおける分析カテゴリーとしての記憶、アイデンティティ、歴史遺産」、柴宜弘編『バルカン史と歴史教育——「地域史」とアイデンティ

- ティの再構築』, 明石書店, 2008年, 26-46頁  
マゾワー、マーク「バルカンに歴史はあるか」、柴編上掲書, 80-89頁  
福岡伸一『世界は分けてもわからない』講談社現代新書, 2009年  
Todorova, Maria, *Imagining the Balkans*, Oxford Univ. Press, 1997